

対話を通じて問うこと —哲学対話と心理療法の接点から—

中村 麻里子^{*1}・角藤 比呂志^{*2}

Inquiry Through Dialogue : From the Contact Point
Between Philosophical Dialogue and Psychotherapy

NAKAMURA Mariko·KAKUTO Hiroshi

In this article, philosophical dialogue and psychotherapy were arranged as a form of “inquiry through dialogue”. One’s experience accompanied by such a form of inquiry was examined using examples of philosophical dialogue and psychotherapy. It was suggested that “inquiry through dialogue” entailed consciousness of one’s thought, and a sense of “feeling it to be genuine”. In addition, dialogue with others seemed to help generate a feeling of difference from one’s own sense, and make one more conscious of “feeling it to be genuine”. It was conceivable that dialogue would clarify one’s thought and lead to new inquiry.

キーワード：哲学対話、心理療法、問うこと

Keywords : philosophical dialogue, psychotherapy, inquiry

*¹ 東洋英和女学院大学 人間科学部 講師
Lecturer, Faculty of Human Sciences, Toyo Eiwa University

*² 東洋英和女学院大学 人間科学部 教授
Professor, Faculty of Human Sciences, Toyo Eiwa University

1. はじめに

私たちは生活の中で、分からないこと、気になること、不思議だと思ふことに出会う。それらを「問題」や「問い」と呼ぶとすると、それらに対して知りたい、理解したいと働きかける行為は「問う」という行為であると言える。日常的には、そうした問題について考えたり、調べたり、あるいは人に聞いたりすることで「問う」ことがなされているが、より精緻化された方法で「問う」ことを為しているのが、哲学や科学といった学問であるかもしれない。

さて、「問う」行為の一つとして、「哲学対話」を取り上げたい。哲学対話とは、主に哲学的訓練を受けた人が集まった人々の中に入り、皆で何かしらの問いについて話し合い、考えていこうとするものである。哲学対話には哲学カフェや子どもの哲学などさまざまな活動があるが、総称して「哲学プラクティス」とか「哲学対話」と呼ばれている。哲学対話もまた「問う」ことの一つのあり方であるが、対話、つまり話し合いによって「問う」ことを進めていこうとする点に大きな特徴がある。

また、本稿でもう一つ取り上げたいのは、心理療法である。心理療法が人の抱える「問題」に働きかけようとする専門的な方法の一つであるとすると、心理療法も、対話を通して「問う」ことを行っていると言うこともできるのではないかと思われる。

哲学者の鷺田清一と臨床家の河合隼雄の対談では、鷺田によって哲学対話の一つのやり方が紹介されると、河合が「それは、われわれも同じことをやっていると言ってもいいぐらいですね」と答える場面がある¹。(何が「同じこと」なのかは、そこでは詳しく語られていない。)哲学対話と心理療法は、一見異なる営みのようであるが、特に言葉を用いておこなう心理療法と比較すると、「対話を通じて問題を問うていく」という点で、両者には共通の面があるのではないかと筆者は考えている。

そこで本稿では、哲学対話と心理療法が「対話を通じて問う」という形式を共有していると

いう考えのもと、「対話を通じて問う」という行為がどのようなものなのかについて、特にその過程で生じる心理的体験を中心に、哲学対話と心理療法の実践例を通して考察を試みることにしたい。

なお、哲学対話と心理療法の関係については、哲学対話の活動の一つである哲学カウンセリングの領域を除いて、ほとんど論じられていないと思われる。哲学カウンセリングは哲学者が人々の相談に乗るというもので、目的は治療ではなく、「健康な人へのセラピー (therapy for the sane)」であり、現在は企業のコンサルテーションなども含んだ幅広い活動となっている。哲学カウンセリングは確固とした方法や体系を目指すというよりも、それぞれの哲学者がそれぞれのやり方で取り組んでいる印象を受ける²。哲学カウンセリングと心理療法の違いは哲学カウンセリング研究における大きなテーマであるが、哲学カウンセラーのラビも指摘するように、哲学カウンセリングは方法を定めないことでその内容があいまいになり、活動の多様さもあって、心理療法と区別されるべき独自性を際立たせることが難しくなっているように思われる³。哲学カウンセリングと心理療法の関係については、最後に補足的に考察をおこないたい。

2. 「対話を通じて問う」ことの特徴

本節では、哲学対話と心理療法の概要を「対話を通じて問う」という点から整理した上で、「対話を通じて問う」ことの形式的な特徴を取りだすことにしたい。

2.1 哲学対話

哲学対話には哲学カフェや哲学カウンセリングなど、さまざまな種類があるが、ここでは3で取り上げる実践例との関係から、「子どもの哲学 (Philosophy for/with Children: 以下 P4C)」を紹介する。

P4Cは、主に小中学校の教室で、生徒と共に哲学対話をおこなうものである。特に決まった方法があるわけではないが、ここでは、筆者

(中村) も参加したことがあり、現在日本でおこなわれている P4C の主な方法として考えられるものの概要を述べる⁴。まず、ファシリテーター（進行役）は生徒の輪の中に入り、生徒に絵本などの素材を示してそこから話し合いたいことを挙げてもらったり、素材はなく普段から不思議に思うことや皆で話し合いたいことを考えてもらったりする。そして、その中から問いやテーマを皆で決め、皆で対話をおこなっていく。最後にはその対話を振り返り、人の話をよく聞くことができたかなどの自己評価等をおこなう。ファシリテーターは全体を通して、生徒が自分の考えたことを安心して表現できるよう、その場の「知的安全 (intellectual safety)」が保たれるように十分に配慮することが求められる。知的に安全であるとは、誰の発言にも敬意を持って耳を傾ける場になっているということである。

P4C における対話は、一つの問いのもとで、生徒が考えていることを発言したり、誰かの意見に対して質問や意見を述べたりすることで進んでいく。その中で最初の問いが変わっていくこともある。ファシリテーターは発言の意味を明確にするよう求めたり、発言の理由や根拠を質問したり、進行中の論点を整理するなどして、できるだけ皆がその問題に参加し、議論がかみ合って話が深まるように気を配る。参加者である生徒の間でもそうした質問をし合うことで、ただの世間話に終わらず、その問題に関する考えが深まっていく。最終的にはファシリテーターがほとんど口を挟まなくても、生徒たちがお互いに話し合いを促進できるようになるとよいとされている。また、皆で一つの答えを出すことは必ずしも目的とされていない。むしろその対話の過程で、人の言うことをよく聞いて、その上で自分なりに考えることが重要視されている。

P4C という哲学対話は、参加している生徒やファシリテーターが質問や確認などを挟みつつ、人の意見を聞き、話すことを通じて、問題となっていることを考えていくという意味で、

「対話を通じて問う」ことであると言える。

2.2 心理療法

心理療法はその種類が非常に多岐にわたっており、一概に述べるのが難しいとされているが、一般的には、「心理的な方法を用いて、来談者のメンタル・ヘルスと人生の歩みかたを援助しようとするもの⁵」であると言える。さらに「(来談者が) 望む方向への変容を手助けする⁶」ことや「来談者の問題点の修正、改善、解決、解消⁷」などが目的として挙げられることもある。本稿では対話を問題にすることもあり、力動的心理療法を代表とする、セラピストとクライアントの関係性および心の内面の動きを重視する心理療法、そのなかでも言葉を用いて一対一で面接をおこなっていく方法を、心理療法として指すものとした。

心理療法は、相談に来た人（以下クライアント）が抱える心理的な悩みや困っていることをもとに、ある一定の構造化された枠組みの中で⁸、セラピストとの関係性に支えられながら問題に取り組んでいくものである。その際に行われる話し合いは、普通の会話とは異なっている。たとえば臨床家の河合俊雄は、心理療法について、「セラピストが主導して指示したり、解決を教えたりするのではなくて、あくまでクライアントが自分で主体的に語っていき、自分で解決を見いだしていく⁹」と述べている。すなわちクライアントはセラピストとのやり取りの中で、自分なりにその問題について語り、どうするか考えていくことが求められる。そのため、その対話におけるセラピストの重要な役割は、クライアントが自分なりにその問題について語り、考えることを助けるような介入を行うことであると言える。

クライアントによって持ち込まれる問題を元に、どんなことを話し合っていくのかは、初期の段階で互いに共有した上で話し合いを始めるのが普通である。何をテーマに話していくのか、経過の中でセラピストが改めて確認をおこなうこともなされる。

心理療法においては通常、クライアントの問題を「問う」という言い方はしないように思われるが、問題に取り組んでいく、それについて考えていくという意味でここではとらえたい。そうすると、セラピストとのやり取りを通じてクライアントの問題を考えていく心理療法の取り組みは、「対話を通じて問う」ことであると言えるのではないかと思われる。

2.3 「対話を通じて問う」とは

2.1と2.2で見てきたことから、「対話を通じて問う」という行為がどんなものであるのか、現時点で共通すると考えられる部分を取りだしておきたい¹⁰。

A：問いや問題について

B：二人以上で話をする

Aについての補足：問いや問題は参加者のうち一人が持ち込む

Bについての補足：そのうち一人はその場を設定し、ある特別な仕方に取り組むことを支える

「B：二人以上で話をする」についてであるが、これがどのような「話をする」ことなのか重要である。これについては次節において、哲学対話と心理療法の「問う」ことに共通する体験を検討する中で考えたい。

また、「Bについての補足」にある通り、複数人でただ何かの問題について話すというだけでなく、そのための場を設定し、特別な仕方での問いへの取り組みを支える者がおり、その人も対話の場に加わっているということも、この種の「問う」ことを独特のものにしているのではないかと思われる。その特徴は対話のあり方にも影響していると思われるが、それについては次節でも言及する。

3. 「対話を通じて問う」ことにともなう体験

本節では、哲学対話と心理療法それぞれの実

践の例を通して、「対話を通じて問う」ことを特徴づけていると考えられる、「問う」ことにともなう心理的体験について、考察をおこなう。

3.1 哲学対話：真の平和とは何か

ある小学校における哲学対話の一部を抜粋して紹介する¹¹。このクラスでは、「皆で話し合ってみたく、それについての自分の意見、そう考える理由」をワークシートに書いてくることになっていた。ファシリテーターが一人の生徒にそれを発表してもらうところから取り上げる。(S1、S2…は生徒の発言、Tはファシリテーターの発言とする。発言が繰り返しになるところは一部省略してある。)

【対話例】

S1「えーと、私は、真の平和のことについて考えました」

T「はい」

S1「私の意見は、対立しすぎだと思います。で、そう考える理由は、私たちは、同じ地球で生まれた身なのに、争ってばかりいるからです」

T「ふーん…だから対立しすぎだということね。なるほど。なんか質問ありますか？今の意見を聞いて。賛成とか反対とか」 ※少し待つ

S2「なんで、争いがあるんですか」

T「なんでだと思いますか？」

S2「えーっと…国で、権力が欲しいから」

T「国で権力が欲しいから。どう？皆納得した？分かった？分かんなかったら聞いてみて？」

S3「さっき、真の平和は、争ってばかりいるからいけないって言ってるけど、争ってなかったら、真の平和なのか」

T「なるほど。どう思いますか？」 ※教室内でこそそそ相談する声

T「まずちょっと（S1に）聞いてみようか。うん。今に対して、再質問でもいいですよ」

S1「えー、今S3が言ったのは、争ってばかりいなかったら平和なのかってことですよな…」

T「これ今、面白い質問だと思って僕も聞いてただけだけど、どうかな。…どう？今聞かれ

たことについては、どう思う？どう答えたらいいと思う？難しい質問をしてきたよね、今ね」

※ 教室内から「難しいよね」の声

T「いやいい質問だったと思いますよ」

S1「でも、人間はそういう下心があると思う」

T「人間はそういう下心があると思う。ちょっとわかりました、他の人も聞いてみましょうか」

S4「そもそも争いがあったら平和じゃないから、争いがないっていうことはやっぱり平和だと思います」

T「争いがないことは平和だと思うってことね」

S5「大きい争いじゃなくて、小さい争い、ケンカとか、ケンカはいけないけど、少しのケンカとかだったら、それは平和なんじゃないかなって思う」

T「それは平和」

S5「うーん…ケンカするほど仲がいいって言うじゃないですか」

T「ああ、なるほどね、なるほど」

S6「平和は、国が平和っていうじゃないですか。たとえばケンカとかしたら、ケンカとかしても、平和だと思う。国のこと言ってるから。ちっちゃいケンカは、(聞き取れない)」

T「え、ちっちゃいケンカは平和だけど？」

S7「戦争とかは、平和じゃなくて、国のケンカだと思う」

T「じゃ、クラスの中で、皆がケンカし合ったら、それは平和？」

S7「それは平和じゃないけど。国のケンカとは…」

T「国のケンカとはちょっと違うじゃないかっていうことね。なるほど」

S8「戦争しないと皆平和だと思ってるけど、韓国や中国の竹島や尖閣諸島の問題で、それでも争いが続いているから、そういうのも、平和じゃなくて、島を争ってるっていう感じなんじゃないか」

T「ふんふんふん。っていうことは、実際今争ってるけど、戦争してないもんね」

S8「戦争してないのに、なんか、争っちゃってる。島を」

T「なるほど。戦争してないのに争っちゃってる状態がある。これさ、一番最初に発言してくれた人はさ、今みたいなこと考えてた？」

S1「いえ」

T「あーなるほどね。争いがなくても、平和じゃないっていうのは、そういうこともあるだろうと。他になんか例って挙げられる人いるかな？争いはないけど真の平和じゃない状態の例ね」

S9「争いよりも、アフリカとかでは、貧しい生活を強いられて、全然平和じゃないと思う」

T「それは争いがないけどってこと？」

S9「はい」

T「争いはないけど、貧しかったりしたら、平和じゃない」

【対話例に関する考察】

この対話では、「真の平和について」「対立しすぎだと思う。なぜなら争ってばかりいるから」という S1 の意見から「争わなければ平和なのか」という S3 の問いが出て、それについて検討していくという流れになっている。生徒によって述べられる意見は内容としてばらばらに並んでいるわけではなく、互いの問いや意見に刺激を受けて（特に S4 から S8）、流れの中で自分ではどう思うかを考え、その上で発言がされている。すなわち、発言していない間も、生徒たちは考えながら聞いていることが分かる。

発言した生徒は発言内容についてファシリテーターに質問をされることにより、自分が考えていることをさらに明確に意識することになっていると思われる。ファシリテーターが発言を簡単に繰り返すので、自分の発言をそれによっても確認することができる。

また、最初に問いを出した S1 が、その後にはファシリテーターに S3 の問いについて尋ねられて、少しとまどった様子を見せているが、ここにはもともと自分の提出した問題に関する気づきだけでなく、自分はそういうことについて考えていなかった、という自分への気づきがありそうに見える。

この対話において、ファシリテーターは S3

の問いについてS1に聞いたり、「面白い質問だな」と思って聞いていた」と感想を言ったりして、ファシリテーター自身がS3の問いにフォーカスしていることがうかがえる。これは、S3の問いが「真の平和」という元の問題を考える際に役に立つ、議論の広がりそうな問いであるとファシリテーターが感じたからであると思われる。実際、そこから生徒たちはそれに関する意見を次々に述べていき、「争い」や「戦争」との関係に言及しながら、「平和」とは一体どんなことなのかについて、考えを深めているように見える。つまり、ファシリテーター自身も生徒の意見について感じたことや考えたことを、その問いを深めていくことに利用しているのである。

この対話例を通して、哲学対話における「問う」ことにともなう体験として重要であると思われるのは、対話の中で「自分が考えていること」を意識することである。生徒たちは他の生徒の意見を聞いて、自分はどう思うかを考えたり、ファシリテーターに質問をされて、自分の考えをもう一度意識したりしている。このことはファシリテーターについても言うことができ、ファシリテーターもその場で自分が考えていることを意識することで、生徒の対話の進行を支えることになっている。

3.2 心理療法：Aさんの事例

次に、心理療法の事例を取り上げたい。以下に紹介する事例は、筆者（中村）の臨床経験に基づくものであるが、本質的な部分を残して詳細については相当の改変および削除をおこなった。また、哲学対話とは異なり、複数のセッションの経過を記述する形を取った。哲学対話はほとんどの場合1回のセッション内でそのテーマが一旦終了することもあり、セッションの断片を取りだすことによってその特徴が伝わるが、心理療法はセッションを重ねる中でゆっくりと対話による変化が生じるため、面接経過の概要を示す必要があると考えた。

なお、セラピストは個々のセッションの中で、

Aさんの話に関して分からないところを聞いたり、Aさん自身はどう思うかを尋ねるなどの介入をおこなっている。また、Aさんが「～なんですけど…」と言いだす場面では、Aさんにその気持ちを聞くだけでなく、セラピスト自身がAさんの気持ちを推測して問いかけるといったこともしている。（「～という気持ちなのかな」など。）

【事例】

中学生のAさんは、全然勉強しないということで、親に連れられて相談に来た。面接が始まった当初Aさんは、勉強のやる気が起きないと語り、勉強するように親に言われることに対して、正論だと思いつつもじっくりいかないと感じる気持ちについて、迷いながら言葉少なに話した。一方で、Aさんは親に言われるままに相談室に来ており、セラピストとの面接にも素直に応じた。セラピストは、Aさんは親に不満をもっているようだが、それは非常にぼんやりとしていると感じた。

初期の段階で、セラピストより親との関係について考えていくことを提案し、Aさんも了承した。その後は、Aさんが親との関わりの中で感じていることを中心に話が進んだ。

Aさんは面接を重ねるうちに、自分は今まで親の言う通りにしてきたが、もう放っておいてほしいということを面接の場で話すようになった。また、面接の場では家と違って自分の考えが言える、家では言えないとのことだった。

しばらくそれが続いてきたが、あるとき何かのきっかけで、Aさんは、放っておいてほしいということを親にはっきり話すことができた。何度かの話し合いの結果、親はAさんの主張を認め、Aさんの生活にあまり口を出さなくなった。その後、Aさんは自分なりのペースで勉強をするようになった。

【事例に関する考察】

セラピストとしては、Aさんの「親の言うことに対してじっくりいかない気持ち」の中に、

Aさんの抱える問題にとって重要なものが含まれているように思われた。それはまだはっきりしないが、Aさんの年齢や親に関する話から、その「しっくりいかない気持ち」は心理的な自立に関わっていると推測を立てた。そして、担当者としてAさんのその「しっくりいかない気持ち」についていこうと考え、親との関係について考えていくことを提案した。

この事例の過程において、Aさんは当初言葉に迷いがあり、特に親に関することについては言いよどむことが多かった。だが話をしていくうちに、Aさんは面接場面で自分の思っていること、言いたいことを徐々に表現できるようになり、自分が親に対してどう思っているのか、自分がどうしたいのかが、以前より明らかになっていった。それは親に自分の意見をぶつけることにつながり、その取り組みの結果、当初問題として持ち込まれた「勉強に対するやる気が起きないこと」自体を、最終的に変えることになっていった。

この事例では、自分が本当のところどう思っているのか、自分がどうしたいのかを話すことを通して意識していくことが、元の問題を変えていくことにつながるが示されている。また、その際、セラピストがクライアントの問題を見極め、その見立てのもとで話をしていくことにより、クライアントにとって重要な問題に近づくことの助けになっている。そのためセラピスト自身も、クライアントとのやり取りを通して、自身が何をそこに感じて考えたのかを意識できることが、事例の展開に貢献することになる。

3.3 二つの実践例から分かること

哲学対話と心理療法の実践例の考察からは、そのどちらの対話においても、自分が話したり人の話を聞いたり、人から尋ねられたりする中で「自分がその問題に対して考えていること」の意識を促されていることが分かる。こうしたことは、単に発言者だけでなく、ファシリテーター、セラピストを含めて、それを聞いている

側の人にも当てはまる。話を聞く中で自分がどう考えているのかが刺激されるのである。

このとき、その考えについて、自分の中で「こう考えている」と意識できるためには、そこに自分の中で「それが本当だと思える」ある種の感覚、「自分らしい」と思える感覚に触れていることが必要ではないかと思われる。その感覚があるために、自分の中で何を考えているか、それが本当に自分のものなのかどうかが分かることになる。

心理療法の事例において、Aさんは「しっくりこない」という感覚について話した。Aさんは面接の過程でさまざまなことを話しながら、徐々に「しっくりくる」感覚を自分の考えの中に見出していったのではないかと思われる。そしてそのことが、Aさんを変えることにつながっているように見える。また、哲学対話の対話例において、S1は対話の途中で改めて自分の考えをファシリテーターに問われてとまどいを見せている。S1は、生徒の発言を聞きながら自分の元の考えとのずれを意識しているからこそ、とまどっている。この後S1の考えがどのように変化していくかはここでは分からないが、そのとまどいに注意深く意識を向けていくことが、元の自分の考えを深める手がかりになるだろうと思われる。このように、「対話を通じて問う」という形式は、「自分が考えていること」を意識することを促され、自分の中で「本当だと思える」感覚に接近する体験をとともうものである。哲学対話と心理療法の目指すところは異なるが、どちらもそこでの問題を通して「それが本当だと思える」感覚に接近し、「自分が考えていること」を見極めながら進むので、「問う」際の体験としても似てくる面があるのではないだろうか。

「自分が本当のところ考えていること」は、いつも自分にとって明確なわけではない。それは、考えてもすぐには答えの出ないような問題を考えようとするときにはなおさらである。哲学対話も心理療法も、生活の中で「分からないこと」を誰かと一緒に考えようとする営みであ

り、「対話を通じて問う」という方法を共有しているとすると、その「対話を通じて問う」ことにともなうものは、その問題について「自分が考えていること」を探す体験であり、その過程で自分の中で「本当だと思えること」に触れることではないかと思われる。そしてそれは、その場に参加する者だけではなく、ファシリテーターやセラピストも体験していることであると考えられる。そのような「対話を通じて問う」ことの結果、物事や自分自身について、自分の中でさらに考えを深めていくことができるのではないかと思われる。

4. 「問う」行為をひきおこす体験

「対話を通じて問う」とき、その「問う」ことをひきおこす体験についても、補足的に考察を加えたい。

3.1でも指摘したように、哲学対話の対話例からは、生徒が他の生徒の発言に刺激を受けて発言していることが見てとれる。たとえばS3の「争っていないかったら平和なのか」という問いは、S4の「そもそも争いがあったら平和じゃないから、争いがないっていうことはやっぱり平和だと思います」という発言を引き出している。S4はS3の発言の「争いがなければ平和なのか」にずれを感じ、自分の「平和とは争いがないことである」という考えに気づいた。また、次のS5の意見は「少しのケンカとかだったら、それは平和なんじゃないか」であるが、これはその前のS4の意見が平和というものの見方が一面的であることへのひっかかりがあって、「争いの種類によっては平和なこともある」ことを主張するものである。

心理療法の事例においては、Aさんは親の言動について「じっくりこない」と違和感を示した。それはまだぼんやりしたものであったが、セラピストはそれが手がかりになると感じ、親との関係について話していくことを提案した。その後、親と自分の考えの違いについて、Aさんは明確に言葉にするようになっていった。

ここで挙げた「ずれ」「ひっかかり」「違和感」は、どれも「自分」とは何か異なるという感覚である。3.3で述べた「自分の中で本当だと思える」感覚が刺激を受けるのは、このような「自分とは異なる」感覚があるからこそなのではないだろうか。そこから3.3でも述べた「自分が考えていること」、つまり新たな問いや考えが引き起こされているように思われる。「問う」ことは一見したところ能動的な作業に見えるが、それを引き起こすのは違和感などの受動的な感覚であり、ファシリテーターやセラピストに支えられてそれに十分に注意を向けることが、その人なりに「問う」ことを引き起こすのではないかと思われる。

「問う」ことのきっかけが受動的な感覚に注意を向けることにあるなら、それが対話であること、ファシリテーターやセラピストという自分以外の参加者、つまり他者と共に話をしていくという形式は、一人でその問題を考えたり、ただ何となく誰かと話すよりも、そのようなきっかけをより多く与えてくれることになるだろう。「対話を通じて問う」ことは、「自分とは異なる」感覚に触れていくことをより促すような特徴を備えていると言える。

5. おわりに

本稿では、哲学対話と心理療法を「対話を通じて問う」という形式を持つものであると整理し、実践例を通して、その「問う」ことにともなう体験について考察をおこなってきた。「対話を通じて問う」ことには「自分が考えていること」を意識することが必ずともなっているが、その際に「自分の中でそれが本当だと思える」感覚に接近することが生じているのではないかと思われる。また、対話において他者の発言にずれや違和感など「自分」とは異なる感覚が生じさせられることは、「本当だと思える」感覚を意識させるきっかけになり、「自分が考えていること」を明らかにしたり、さらには新たに「問う」ことにつながっていくのではないかと考えられる。

以上で見てきたことから、1で言及した哲学カウンセリングについても付け加えておきたい。もし哲学カウンセリングが、本稿で考察をおこなった「対話を通じて問う」という方法に関して共通の形式を持っているとすると、心理療法とは異なる独自性をもつものとして区別するのはさらに難しくなるのではないかと推測される。本稿で扱う範囲を超えるが、哲学カウンセリングと心理療法の関係について、「対話を通じて問う」という点から検討を行うことは、哲学カウンセリングの理解に役立つのではないかと考えられる。

-
- ¹ 河合・鷺田 (2003)、p. 134。
² Marinoff(1999)、Marinoff(2001)、Raabe(2000/2006)を参照。
³ Raabe(2000/2006)。
⁴ 河野 (2014) およびジャクソン (2013) を参照。
⁵ 遠藤 (2004)、p. 355。
⁶ Prochaska&Norcross (2007/2010)、p. 6。
⁷ 乾 (2005)、p. 13。
⁸ 「ある一定の構造化された枠組み」とは、具体的には時間や場所、料金などのことを指す。
⁹ 河合 (2013)、p. 11。
¹⁰ ここで整理した「対話を通じて問う」形式は、主に大人を対象として哲学対話をおこなう哲学カフェにも当てはまるものと考えている。哲学カフェについては鷺田 (2014) を参照。
¹¹ 2012年9月に行われた神奈川県内の私立小学校5年生における研究授業の一部である。ファシリテーターは土屋陽介氏 (立教大学兼任講師／開智中学・高等学校「哲学対話」担当講師) が務めた。

〈参考文献〉

- トーマス・E・ジャクソン (2013) 「やさしい哲学探究」
 中川雅道訳、『臨床哲学』第14号(2)、pp.56-74。
 河野哲也 (2014) 『「子ども哲学」で対話力と思考力を育てる』河出書房新社。
 Lipman, M. (2003) *Thinking in Education. second edition*. Cambridge University Press. (河野哲也・土屋陽介・村瀬智之監訳 (2014) 『探求の共同

体 考えるための教室』玉川大学出版部。)

- Marinoff, L. (1999) *Plato, Not Prozac!: Applying Eternal Wisdom to Everyday Problems*. Harper Collins Publishers. (渡部昇一訳 (2002) 『考える力をつける哲学の本』三笠書房。)
 Marinoff, L. (2001) *Philosophical Practice*. Academic Press.
 Raabe, P. B. (2000) *Philosophical Counseling: Theory and Practice*. Praeger Pub. (加藤恒男・岸本晴雄・松田博幸・水野信義訳 (2006) 『哲学カウンセリング 理論と実践』法政大学出版局。)
 鷺田清一監修、カフェフィロ編 (2014) 『哲学カフェのつくりかた』大阪大学出版会。

〈引用文献〉

- 乾吉佑 (2005) 「心理療法の教育と訓練」。乾他編『心理療法ハンドブック』創元社。
 河合隼雄・鷺田清一 (2003) 『臨床とことば 心理学と哲学のあわいに探る臨床の知』阪急コミュニケーションズ。
 河合俊雄 (2013) 『ユング派心理療法』ミネルヴァ書房。
 遠藤浪江 (2004) 「心理療法、精神療法」。小林司編『カウンセリング大事典』新曜社。
 Prochaska, J. O. & Norcross, J. C. (2007) *Systems of psychotherapy : a transtheoretical analysis. sixth edition*. Cengage Learning. (津田彰・山崎久美子監訳 (2010) 『心理療法の諸システム 多理論統合分析』金子書房。)